九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『大いなる帰滅の物語』（Mahasamvartanikatha）：第5章2節～4節と並行資料の翻訳研究

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門インド哲学史 ： 教授 ： インド仏教

https://doi.org/10.15017/3649

出版情報：哲學年報. 64, pp.1-32, 2005-03-05. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『大いなる帰滅の物語』
(Mahāsaṃvartanīkathā)

第5章2節～4節と並行資料の翻訳研究

岡野　潔

昨年の『哲学年報』でMSK第2章4節～第4章1節とその並行資料が訳された(注1)。本稿では第一部において第5章2節～4節が訳され、第二部でその並行資料が訳される。

世界の神話的な歴史を語るMSKは過去から現在までの時代の記述を第4章2節までで終え、第3節以後は未来の記述となる。未来の時代が住劫から壊劫に移ると、宇宙的な規模で世界が消滅する終末的な出来事が説かれる。壊劫が開始される第5章第1節においてはすべての有情が世界（地獄から梵天界までの世界）からいなくなる過程が説かれ、次いで第5章2節～4節において、火による外器世界の完全な破壊の過程が説かれる。アビダルマの時代に確立したこの外器世界の破壊に関する教説は、古くに遡れば阿含・ニカーヤ文献中の七日経の記述を源泉にしている。本稿で扱うMSK第5章2節～4節の内容は、この七日経と密接に関係している。

七日経は初期経典としては珍しく、宇宙論的なテーマを真正面から説いた経典であり、後の時代に体系化された宇宙論では聖典的根拠の一つとして尊ばれている経典である。七日経とは便宜上の呼び方で、部派によって多少経名が違う（たとえば有部では『七つの太陽の出現の経』Saptasūryodayasūtraと呼ばれる）が、私は執筆上の便利のために、各部派がもつ同内容の経をすべて七日経と呼びたい(注2)。七日経の現存する諸伝承から特に重要な三つの伝承を和訳したのが本稿の第二部である。三つの伝承とは、(P) パーリ上座部の七日経、(U) 説一切有部の七日経（倶舎論の注釈文献ウパーイカーに引用された七日経)、(L) 犢子正量部に属すると思われるLoka-pの中の、七日経に相当する部分で

ある。七日経における諸伝承の比較は、昨年の論文におけるアッガンニャ経の諸伝承の比較と同じように、正量部の阿含と他部派の諸阿含の伝承の間の、「近さ遠さ」や「古さ新しさ」の関係を知るための、滅多にない貴重なチャンスとなる。

第一部　MSKと文献Xの翻訳[注3]

第5章第2節　太陽の出現

〔5.2.1〕 そしてこのように［生ける者が悉くいなくなって］空虚になったこの世界に、神は長い時にわたって雨を降らさない。乳を失った子牛が［ひからびて死ぬ］ように、［水を失った］蔓草や雑草や樹々は[注4]ひからびるだろう。

〔蔵文§194〕 その後、空虚になった器世間に1劫半の間、神が雨を降らさないだろう。その時、灌木・蔓草[注5]などが完全にひからびるだろう。

【並行資料：P4、L2、4、U4、立世論 32、222c29-223a3；世記経 1、137c11；増一 2、736b1-7】

〔5.2.2〕 ［地上のあらゆる］小さな溝渠や河を飲み干さんと欲する渇者のように、二倍の大きさの、第二の太陽がこの世界に出現するだろう。三十三天に出現したそれによっておそわれた天上の神々の世界は、［その］下で焼けるだろう。

〔蔵文§195〕 その後、三十三天において、前の二倍になった大きさをもつ太陽が出現して、［その］下にある一切のものを燃やすのは、1劫半の間にわたってである。その時に、小さな河やその他の、すべての河[注6]が干上がるだろう。

2 【並行資料：P6、L6、U6、立世論 223a6-9；世記経 137c17-18；増一 736b8-12】

〔5.2.3〕 ［更に］それよりも二倍の大きさの、第三の［太陽］が、ヤーマ天の頂に出現して、それより下［のすべて］を熱するだろう。その時、あたかも［太陽に］飲まれることを畏れるかのように、マーナサ［湖][注7]を始めとする、底知

れない深さの湖たちも、干上がるに至るだろう。

〔蔵文§196〕 その後、ヤーマ天の頂において、第二の太陽の二倍の大きさをもつ第三の太陽が[出現し]、[その]下方を燃やすのは、1劫半の間にわたってである。その時に、無熱悩(*anavatapta)を始めとする、大きな湖が干上がるだろう。

【並行資料：P8、L8、U8、立世論 223a11-13；世記経 137c24-26；増一 736b13-14】

〔5.2.4〕 第三のものよりも二倍の[大きさの]第四の太陽が、トゥシタ天(兜率天)に依拠して下方を熱するだろう。七大河は(注8)その[太陽の]光線を浴びるだけで干上がって、炎熱を和らげることもできないだろう。

〔蔵文§197〕 その後、第三の太陽の二倍の大きさをもつ第四の太陽が兜率天の頂において出現し、1劫半の間にわたって[その]下方を燃やす。その時に、七大河が干上がるだろう。

【並行資料：P10、L10、U10、立世論 223a15-19；世記経 138a2-5；増一 736b15-16】

〔5.2.5〕 下の[世界すべて]を焼くために、第四のものよりも二倍の大きさの[第五の]化楽天に属する太陽が、ここに出現するだろう。水の集積(海)は、とても渇した者であるそれ(太陽)を見て、[自分を]守ってくれる他者を見出せなかったので、[やむなく]美しい体をもつ者(太陽)[の体の中]に入るだろう。

〔蔵文§198〕 その後、第四の太陽の二倍の大きさをもつ第五の太陽が化楽天の頂において出現し、1劫半の間にわたって[その]下方を燃やす。その時に、残りすべての大海が干上がるだろう。

【並行資料：P12-16、L12-16、U12-20、立世論 223a20-b1；世記経 138a10-b1；増一 736b17-22】

〔5.2.6〕 低いところへならどこにでも[水が]流れてゆくにもかかわらず、

次第に河の王（海）は浅くなってゆくだろう。[作者の感想：] 人々が [次のように]語ることは真実である――『水の性質をもつものは、結果がさかさまになる行為を有する』と(注9)。

〔蔵文§199〕 [大海は] 次第に、仰向けに横たわった体で（浅くなった姿で）現われる。

〔5.2.7〕 絶えざる揺動をひたすら欲する者（海）は、集まった激しい水流の勢いを [今や] 失い、干上がってしまうが、それはあたかも、極めて不信心なる者たちのために、眼前に明白に見えるかたちで**無常の** (anitya) ありさまを作って示してやろうとするかのようである。

〔5.2.8〕 今日、海中に [多くの] 山々は沈んでいて、山頂すらわずかに水面に出すことも出来ないありさまである。しかしもしその海すらが、[未来において、干上がるに至るという] そんな状態を有するならば、他の、有為法（形成されたもの）に属するすべてのものは、どうして**恒常なもの** (dhruva) でありえようか。

〔5.2.9〕 今日、空に浮遊する山々のような雲たちは、周知のごとく海[の水]を吸って私たちに [それを] 運んでくるが、その時（未来に）水がそこ（海）において一指節ほどの量すら無くなる時、どうしてこれ（水つまり有為法に属するもの）が、**信頼できるもの** (āśvāsika 安堵してよいもの) だろうか。

【並行資料：P16、L16、U20、立世論 223a29-b1】

4 〔5.2.10〕 他に左右されず、固有のありかたを固く守りつづける海が、[このように] 滅尽してしまうならば、「**つかのまのものではない** (anitvara)、何らかの有為法（形成されたもの）が存在する」というような言は、その場合、全く非真実な意味しかもたない。

〔5.2.11〕 今日、海は甚深さという性質のゆえに、暴風によってすら割断されることはありえないが、[未来において]割断されて、消滅するだろうそれ(海)は、次のように[私たちに]語るごとくである――「**壊れやすいもの** (bhidura)でない、いかなる有為法(形成されたもの)があるだろうか」と。

〔5.2.12〕 ほかならぬ自己だけによって享受されたとしても、この肉体は老化し、この世界で[未来の]海のように滅びる。それ(肉体)においていかなる形成物が有ろうとも、それらすべては**衰滅するもの** (jarjara)である。そのことから[逃れうる]いかなる**避難所もない** (trāṇa+na)。

〔5.2.13〕 今日、[巨大な]山の美を凌駕しながら、巨大魚ティミンギラなどはそれ(海)を拠りどころとして、不安をもたずに棲んでいる(注10)。その海が消滅してしまうものならば、いかなる他の**安息処** (layaṇa)がありうるだろうか。あるいはいかなる有為法が**依り処** (śaraṇa)になるだろうか。

〔5.2.14〕 それゆえ、この生存(輪廻)の暴流を**厭い離れるべきである** (vinirvettum+alam)。いたるところ燃えている家を[厭い離れる]ごとく。わずかの利点もなく欠点[のみ]があるところのものにいかなる賢者が喜びを見出すだろうか。

〔5.2.15〕 あらゆる生存に**欲求を失うべきである** (viraṅktum+alaṃ)。それ(生存)に向けられた欲求は[人を]益するものではない。なぜなら、毒ある食物への欲求が、いかなる者にとって寂静(安楽)をもたらすか。[毒による]災い(死)ではなしに。

〔5.2.16〕 第五の[太陽]よりも二倍大きな、他化自在天に属する[第六の]太陽が、下にある[世界すべて]を焼くために出現する時、地上の山々や他のものは、まるでそれによって苦しめられたかのように、いたるところから息を煙として吐きだすだろう。

〔蔵文§200〕 その後、第五の太陽の二倍の大きさをもつ第六の太陽が他化自在天の頂において出現し、１劫半の間にわたって［その］下方を燃やす。その時に、スメールを始めとする山々と大地は煙を出すだろう。

【並行資料：P18、L18、U22，立世論 223b2-7；世記経 138b6-8；増一 736b23-c3】

〔5.2.17〕 すべての［太陽よりも］上に、第六のものより二倍の大きさの［最後の第七の］太陽が、下方を焼くために、出現する。かくも多くの［太陽］が欲望の諸対象（欲界）を焼くことは正しい(注11)、と［考えて］創造神は別［の世界］を創造することを厭うだろう。

〔蔵文§201〕 その後、第六の太陽の二倍の大きさをもつ第七の太陽が初禅天の頂において出現し、１劫かかって［その］下方の残りすべてを燃やすだろう。

【並行資料：P20-21、L20-21、U24、27、立世論 223b8-14；世記経 138b14-c8；増一 736c4-22】

〔5.2.18〕 この千世界には同数の［千の］スメール山があり、［その］それぞれにおいて、上方に七つの太陽が担われている。［七つの太陽は］善逝のチャイトゥヤ群から傘蓋の一列を盗み去ったかの如くであり(注12)、［そのことを］後悔しつつ、［世界を焼くほどに］熱悩するに至ったかのようである。

第５章における、『太陽の出現』という、第２節［おわる］。

第５章第３節　物的世界の帰滅

6 〔5.3.1〕 世界すべては『うつろい易さ』の火葬の薪に上って、光線を強く欲する初めの諸太陽によって、点火される。すばらしくも、最後の葬儀は、偉大な者たちのために、偉大さを照らすだろう(注13)。

〔5.3.2〕 高くあがった焔をともない、百の恐ろしい轟音をともない(注14)、火は

大地を焼き尽くさんとしながら、次のように鳴り響くかのようである。『無常性と私とは、あらゆるものを食べ尽くす。この世界ではいかなるものも恒常不変であると考えるな』と[注15]。

〔5.3.3〕 水遊びによって時を過ごしながら、やがて海も[注16]、世界終末の炎と化すだろう。まことに、必ず最後に不幸によって随行されないような、いかなる幸福も存在しない。

〔5.3.4〕 すさまじい音を高く響かせながら今や落下せんとする峰々をともなって、火によって今や燃焼せんとするメール山は、次のように語らんとするかのようである――『高くそびえ立つ［存在である］いかなる者にも、無残な崩壊が無いことがあろうか。私のように』と。

【並行資料：P21、L21、U27、立世論 223b11-14；世記経 138c1；増一 736c6-7】

〔5.3.5〕 熱せられた真鍮製の器（鍋）が、少量の水を［たちまち吸い尽くす］ように、熱せられた大地は、下にある水の貯蔵所（水輪）を飲みつつ、その［水輪という］飲み物を完全に吸い尽くすまで、満足するに至らない[注17]。

【並行資料：L23、立世論 223b15-18】

〔5.3.6〕 かの世界終末の炎は、このように自らの依り処である器世間を、あたかも人の灰によって［浄められた］清浄な食べ物であるかのように、食べ尽くした後に、［自らの］依り処を失って、消滅するだろう。まるで自分の肉を食べる者が［消え失せる］ように。

〔蔵文§202〕 その時、初禅天にいたるまで［諸世界は］、灰の残りすら、残存することがないだろう。このように、一切を焼いてのち、［火は］自ら消え鎮まるだろう。薪がなくなった火のように。千世界は同時に滅する。 7

【並行資料：P22，L24，U28，立世論 223b18-21；世記経 138c4-5】

〔5.3.7〕 それぞれ［の上］に追加的に出現した太陽をもつ、六つの太陽が、それぞれ１劫半の間、世界を焼いた後に、［第七の］最後の［太陽］が、１劫かかってすべてを焼き尽くすだろう。あたかも『［焼いている］そのあいだに、私にも追加の［太陽が］現れることがないように』と［考えたか］のように。

〔蔵文§208〕 その後、１劫半の間、雨が降らない。その後、別の五つの太陽が［順に］それぞれ１劫半の間［六欲天のそれぞれの世界の］頂に出現して、下方［の世界］を焼く。第七の太陽が１劫の間、一切を焼くが、［それが第］二十劫［である］。これら［20の中間劫］で［有情世界と外器世界が］悉く滅する。それゆえ壊劫はちょうど20劫から成る。

〔5.3.8〕 松明のように燃焼する(注18)それらの太陽は世界(器世間)と一緒に消滅するだろう。［しかし］もちろん、激しく世界（器世間）に苦熱を与えても(注19)、それらはただちに（一斉に）破壊に参与するわけではない(注20)。

〔5.3.9〕『火から成るそれは、私によって創造されたものである』と思い(注21)、まるで『すべてを燃やした後に、どうか私のもとに来ることがないように！』と考えたかのように、ブラフマー神は、世界のその状況において、［火が届かない］世界破壊の上限(頂)［である極光浄天の世界］へと達する(生まれ変わる)(注22)。

〔5.3.10〕 創造神（ブラフマー神）の住居群は、［もし］破壊されていなくても、・・・するに(注23)至るだろう。なぜなら、主（ブラフマー神）が［ついに］とどまることが出来なかったそこにおいては、他の［梵天界の］者たちの発話はすでに消えているから。

8 【並行資料：L26、立世論 223b22-27】

〔5.3.11〕 このように、サハー(娑婆)と呼ばれる一切の世界は、火によって無くなるだろう、まるでかつて存在しなかったかのように。なぜなら［現在の］諸存在は、［無関心な］中立の立場にいるかのように、過去のことについて、無

関心な自性をもつものだからである。

〔5.3.12〕［世界の］帰滅をともないつつ起こった20劫［の壊劫の時間］がこの世界で経過する。［そこに一度］存在するならば、溝渠を跳び越える者のように、誰が破滅を［跳び越える］(破壊を免れる) ことができようか。

第五章における、『物的世界の帰滅』[注24]という、第三節［おわる］[注25]。

第5章第4節　輪廻を厭離する

〔5.4.1〕このように、一切の『造られたもの』は**無常である** (anitya)、無常性という火の焔によって焼かれるから。このもの (造られたもの、有為) について、「永遠に変わらない」と顛倒からなる妄分別をしていたとしても、何者が美しく見えるであろうか。

〔5.4.2〕さらにまた、この一切は**恒常ではない**(adhruva)。電光の姿のような［束の間の］在続性をもつ［にすぎない］自分の原因に基づいて［一切が成り立って］いるから。これ (一切) に関して、［原因による］支配性が[注26]このような［性質の］ものであるなら、どうしてこの世界で今、自己 (アートマン) に属するものがありうるだろうか。

〔5.4.3〕さらにまた、一切は**信頼できないもの** (anāśvāsika) である。変化を有するものであるから、安堵することができない。もし［仮に］変化するものが、終わりをもたない状態であってすら、苦であるならば、［まして］どうしてそれが終わりをもつにいたって、苦でないことがあろうか。

〔5.4.4〕同様に、一切は**つかのまのもの** (itvara) であって、持続の状態を欠いている。三種の時間 (過去・現在・未来) に依存しているから。無始なるこれ (一切、つまり有為法) に関して、「有始である」という考えをもって、世界を［懸命に］走り回ろうとも、いったい誰が［その］苦労に報いられるだろうか。

〔5.4.5〕 一切は、[互いに]依って生じたものであり、**壊れやすいもの**(bhidura)である。結びつきが解ければ、消滅に向かう性質をもつゆえに。生存(輪廻している状態)に向けられた、束縛(繋縛)たる欲望は、いったい誰において、災厄のみの結果をもたらさないことがあろうか。

〔5.4.6〕 さらに、これら一切は、**衰滅するもの**(vijarjara)である。『老い』という名のものによって襲われる性質をもつゆえに。虫に食われた木材のようなこの世界において、堅固な芯を求めても、かつて誰がそれを得ただろうか。

〔5.4.7〕 いかなる形成物(有為法)もこの世界では**避難処ではない**(trāṇa+na)。[それは]生存の暴流の波によって、自らおし流される。避難処を期待して、それ(有為法)に庇護を求める者は、[生存の暴流の]流れのままに下り落ちてゆくだけであろう。

〔5.4.8〕 この世界にはいかなる**安息処もない**(layana+na)。・・・(本文欠損)[それ(有為法)を安息処として、そこに入ろうとする者は][注27]あたかも、愚か者たちが[焼ける家に]入って、苦しみの[火によって]火だるまになるがごとくである。

〔5.4.9〕 さらに、この世界においては、危難に襲われた者たちが依拠することができる、いかなる**依り処もない**(śaraṇa+na)。明らかにそれ(有為法)から危難が生じてくるのに、どうして同じそれ(有為法)が、その[危難]からの逃げ道になりうるだろうか。

〔5.4.10〕 だからこそ、悪徳という蛇に充ち満ち、知性の眼が愚痴の闇に覆われてしまっている、輪廻の住まいすべてを、[人は]ただちに**厭悪するべきである**(nirvettum+alam)。[信頼できない輪廻の世界を]軽蔑的にあしらうことに慣れ親しんでいるゆえ、いかなる賢者が、予期しない苦しみの発生する可能性に満ちた、捨て去ることのみが唯一の正しい行為であるこの世界において、安堵

の眠りに身をゆだねることができるだろうか。

〔5.4.11〕 多くの災厄の場所［である輪廻の世界］が自らの姿を美しくみせても、いかなる利口者が、その生存の稠林にたいし信頼を抱くであろうか、［美しく］偽装した敵にたいするように。もし最も聡明な知性をもつならば、幸福な状態の獲得のために、速やかにそれにたいし、**欲求を失うべきである** (viraṅktum＋alaṃ)。様々な苦しみを受ける所であるそれに、二度と再び、愛着を起こさないのがよい。

『輪廻を厭離する』という、第4節。『帰滅しつつある状態（壊劫期)』という、第5章［おわる］。

以上、MSKの第5章2節～4節を翻訳したが、特に 5.2.7～5.2.15 と 5.4.1～5.4.11 の各詩節は、七日経の＜諸行無常＞を説く定型句の中の一つ一つの言葉を中核に置いて作られている(翻訳の中の太字の言葉の箇所)。各詩節の中核にあるそれらの語を集めて、MSKの創作に用いられたであろう七日経の＜諸行無常＞定型句を再構築してみると、それは犢子正量部の伝承であるLoka-p（L17、L19）と立世論にある定型句と実に見事に一致する。

表にすると次のごとくである。

MSK 5.2.7～15	MSK 5.4.1～11	*Loka-p*	立世阿毘曇論
2.7 *anitya*	4.1 *anitya*	(1) *anicca*	(1) 無常 **anitya*
2.8 *dhruva*＋*neg.*	4.2 *adhruva*	(2) *adhuva*	(2) 不恒 **adhruva*
2.9 *āśvāsika*＋*neg.*	4.3 *anāśvāsika*	(3) *anassāsika*	(3) 非安息處**anāśvāsika*
2.10 *anitvara*＋*neg.*	4.4 *itvara*	(4) *ittara*	(4) 短促變異 **itvara*
2.11 *bhidura*	4.5 *bhidura*	(5) *bhejjaka*	(5) 破壞 **bhedyaka*
2.12 *jarjara*	4.6 *vijarjara*	(6) *jajjara*	(6) (欠)
2.12 *trāṇa*＋*neg.*	4.7 *trāṇa*＋*neg.*	(7) *atāṇa*	(7) 非能救済 **atrāṇa*
2.13 *layana*＋*neg.*	4.8 *layana*＋*neg.*	(8) *aleṇa*	(8) 非實依處 **alayana*

2.13 *śarana+neg.*	4.9 *śarana+neg.*	(9) *asarana*	(9) 非依蔭處 **aśarana*
2.14 *vinirvettum*	4.10 *nirvettum*	(10) *nibbinditum*	(10) 甚可厭患 **nirvettum*
2.15 *viraṅktum*	4.11 *viraṅktum*	(11) *virajjitum*	(11) 應當離欲 **viraṅktum*
—	—	(12) *vimuccitum*	(12) 應當棄捨 **vimoktum*

［略号　+neg.= with negation　(否定文か、否定的な意味をもつ疑問文で)］

第二部　並行資料の和訳

この第二部では七日経の三つの部派の伝承（パーリ上座部・犢子正量部・説一切有部）が並行資料として和訳される。

P　パーリ上座部の七日経(注28)

L　犢子正量部の『ローカ・パンニャッティ』中の七日経に相当する箇所(注29)

U　有部の倶舎論注『ウパーイカー』中の七日経(注30)

これらの翻訳によって、第一部で訳したMSKと文献Xの伝承が、他部派の阿含・ニカーヤの七日経の諸伝承と、どの程度の距離にあるのかを確認することが出来る。諸伝承と比較してみると、やはりMSKと文献Xの伝承は、Loka-pと立世論の伝承と近い関係にあるという強い印象をうける。特に L8 の大湖、L10 の大河、L23 の真鍮の器の譬喩、L26 の梵天界の宮殿などの箇所で、正量部の伝承の合致が感じられる。

Loka-p と立世論の、七日経にあたる箇所の伝承が、どのようにMSKや文献Xと近く、どのようにパーリ上座部や有部などの諸部派が伝承する七日経の伝
12 承と相違するのかを確認することは、「Loka-p と立世論は正量部に属する」という仮説のため、私が過去の諸論文で行なってきた証明作業の一環となる。漢訳以外で伝わったPUL三本の伝承をここでまとめて翻訳することは、その仮説証明のための比較作業を容易にする(注31)。この三本の伝承に加えて、漢訳世記経・起世経・起世因本経・大楼炭経が属する法蔵部の伝承と、所属部派不明の

増壹阿含経七日品第四十之一が(注32)、別の七日経の伝承を伝えているので、それらを比較することで、インドの小乗諸部派における七日経の諸伝承間の相違が明らかになるはずである。

P　パーリ語聖典（パーリ上座部）の七日経

P1　わたしが聞いたところによると、あるとき、尊師はヴェーサーリーにあるアンバパーリ林に滞在されていた。そこで世尊は比丘たちに「比丘たちよ」と語りかけた。「尊いお方さま」とかの比丘たちは答えた。尊師はこう語った。

P2　比丘たちよ、諸行(現象の形成力)は無常であり、比丘たちよ、諸行は不恒常なものであり、比丘たちよ、諸行は信頼できないものである。そうである以上、比丘たちよ、すべての諸行を厭い離れるべきであり、[それに]欲求を失うべきであり、[それを] 捨離すべきである。(aniccā bhikkhave saṅkhārā, adhuvā bhikkhave saṅkhārā, anassāsikā bhikkhave saṅkhārā, yāvañ c' idaṃ bhikkhave alam eva sabbasaṅkhāresu nibbinditum alam virajjitum alam vimuccitum.)

P3　比丘たちよ、シネール(スメール)山王は長さ八万四千ヨージャナ、広さ(幅)八万四千ヨージャナあり、[下半分が] 大海に八万四千ヨージャナ没しており、[上半分が] 大海から八万四千ヨージャナ突き出ている。

P4　比丘たちよ、多年にわたって、多くの百年にわたって、多くの千年にわたって、多くの百千年にわたって、天が雨ふらさない時が来る。比丘たちよ、天が雨ふらさないので、これらすべての種子植物、草木類(注33)、薬草と雑草と『森の王』は(注34)、ひからびて、からからになり、無くなる。

P5　比丘たちよ、諸行は無常であり、…(P2の文と同文を反復しているため省略)

P6 比丘たちよ、長い時の経過の後に、ある時に、第二の太陽が出現する。比丘たちよ、第二の太陽の出現によって、小さな河や、小さな溝渠はすべてひからびて、からからになり、無くなる。

P7　比丘たちよ、諸行は無常であり、…（省略）

P8　比丘たちよ、長い時の経過の後に、ある時に、第三の太陽が出現する。比丘たちよ、第三の太陽の出現によって、[五] 大河、すなわちガンガー(gaṅgā)、

ヤムナー (yamunā)、アチラヴァティー (aciravatī)、サラブー (sarabhū)、マヒー (mahī) はひからびて、からからになり、無くなる。

P9 比丘たちよ、諸行は無常であり、… (省略)

P10 比丘たちよ、長い時の経過の後に、ある時に、第四の太陽が出現する。比丘たちよ、第四の太陽の出現によって、これらの［五］大河が出ずる源である［七］大湖、すなわちアノッタタ (anotattā 無熱悩)、シーハパパーター (sīhapapātā)、ラタカーラー(rathakārā)、カンナムンダー(kannamundā)、クナーラー (kunālā)、チャッダンター (chaddantā)、マンダーキニー (mandākini) は(注35)ひからびて、からからになり、無くなる。

P11 比丘たちよ、諸行は無常であり、… (省略)

P12 比丘たちよ、長い時の経過の後に、ある時に、第五の太陽が出現する。比丘たちよ、第五の太陽の出現によって、大海の水が百ヨージャナ退き、［次に］大海の水が二百ヨージャナ退き、大海の水が三百ヨージャナ退き、…中略、大海の水が七百ヨージャナ退く。

P13 ［そして］ヤシの樹七本の［高さに］大海の水がある。［次に］ヤシの樹六本、ヤシの樹五本、ヤシの樹四本、ヤシの樹三本、ヤシの樹二本、そしてヤシの樹［一本］ほどの［高さに］大海の水がある。

P14 ［そして］人七人の［高さに］大海の水がある。［次に］人六人、人五人、人四人、人三人、人二人、そして人［一人］ほど、人の半分、腰ほど、膝ほど、踝ほどの［高さに］大海の水がある。

P15 たとえば、比丘たちよ、秋季に莫大な雨滴をもたらす神が雨を降らせるとき、あちらこちらで牛のひずめの跡に水が溜まる。比丘たちよ、まさにそのように、あちらこちらに牛のひずめの跡ほどの海の水が存するであろう。

P16 比丘たちよ、第五の太陽の出現によって、［一］指節ほどの大海の水もなくなる。

P17 比丘たちよ、諸行は無常であり、… (省略)

P18 比丘たちよ、長い時の経過の後に、ある時に、第六の太陽が出現する。比丘たちよ、第六の太陽の出現によって、この大地とシネール山王は煙をあげ、もうもうと煙をあげ、盛んにもうもうと煙をあげる。比丘たちよ、たとえば陶

工の窯が点火され、[まず]初めに、煙をあげ、もうもうと煙をあげ、盛んにもうもうと煙をあげるように、比丘たちよ、まさしくそのように第六の太陽の出現によって、この大地とシネール山王は煙をあげ、もうもうと煙をあげ、盛んにもうもうと煙をあげる。

P19　比丘たちよ、諸行は無常であり、…(省略)

P20　比丘たちよ、長い時の経過の後に、ある時に、第七の太陽が出現する。比丘たちよ、第七の太陽の出現によって、この大地とシネール山王は燃えあがり、燃え輝き、一つの焔となる。比丘たちよ、この大地とシネール山王が燃えつつあり、焼かれつつある時、[それらの]火炎は風によって運ばれて、梵天界まで到達する。

P21　比丘たちよ、シネール山王が大きな火のかたまりに包まれて燃えつつあり、焼かれつつあり、消滅しつつある時、百ヨージャナの峰々が崩壊し、二百ヨージャナの峰々が崩壊し、三百ヨージャナの峰々が崩壊し、四百ヨージャナの峰々が崩壊し、五百ヨージャナの峰々が崩壊する。

P22　比丘たちよ、燃えつつあり、焼かれつつあるこの大地とシネール山王に、灰も［煙の］煤もあることはない。比丘たちよ、たとえば、サルピスあるいは胡麻油が燃え、焼かれるときに、灰も［煙の］煤もあることがないように、比丘たちよ、まさしくそのように、燃えつつあり、焼かれつつあるこの大地とシネール山王に、灰も［煙の］煤もあることはない。

P23　比丘たちよ、諸行は無常であり、…(省略)

P24　このことに関して、比丘たちよ、[涅槃の]境地を見た者たち(注36)以外に、『この大地とシネール山王が焼かれ、消滅して、なくなる』などと、誰が考えられようか。誰が信じられようか。

(経の後半の、善眼 (sunetta) という名の外道師の話を省く)

L　『ローカ・パンニャッティ』(犢子正量部)の七日経相当部分

L1　ここまで(このような状態まで)、『生ける者たちの帰滅』(有情世界の散壊)が[展開した]。[壊劫の前半の]十中間劫が過ぎ去った。

L2　『第二の帰滅』(外器世界の散壊)が現れる時が来る。その時、長期にわたっ

て天は雨ふらさず、水滴を［地に］注ぐことがない。

L3　世尊は以下のように［経において］説かれた(注37)。

L4　長期にわたって天は雨ふらさず、水滴を［地に］注がない時が来る。長期にわたって天は雨ふらさず、水滴を［地に］注がないので、種子植物、雑草、薮（gahana)、『森の王』は［日に］焼かれる。

L5　比丘たちよ、諸行(現象の形成力)はこのように無常であり、このように非有であり(abhūta)(注38)、このように信頼できないものであり、つかのまのもので、壊れやすいものであり、衰滅するものであり、避難処でなく、安息処でなく、依り処ではないものであり、無庇護者たるものである。そうである以上、比丘たちよ、すべての諸行を厭い離れるべきであり、［それに］欲求を失うべきであり、［それを］捨離すべきである。(evaṃ aniccā bhikkhave saṅkhārā evaṃ abhūtā (!) evaṃ anassādikā ittarā bhejjakā jajjarā atāṇā alenā asaraṇā asaraṇibhūtā yāvañcidaṃ bhikkhave alaṃ eva sabbasaṅkhāresu nibbinditum alaṃ virajjitum alaṃ vimuccitum.; cf. L17)

L6　比丘たちよ、長い時の経過の後に、第二の太陽が世界に出現する時が来る。比丘たちよ、第二の太陽が世界に出現することによって、泉や、小さい河はすべて［日に］焼かれて、消滅し無くなる。

L7　比丘たちよ、諸行はこのように無常であり、…云々、そうである以上、比丘たちよ、すべての諸行を厭い離れるべきであり、［それに］欲求を失うべきであり、［それを］捨離すべきである。

L8　比丘たちよ、長い時の経過の後に、第三の太陽が世界に出現する時が来る。比丘たちよ、第三の太陽が世界に出現することによって、あらゆる［大きな］水湖は(注39)［日に］焼かれて、消滅する。

L9　比丘たちよ、諸行はこのように無常であり、…云々、そうである以上、比
16　丘たちよ、すべての諸行を厭い離れるべきであり、［それに］欲求を失うべきであり、［それを］捨離すべきである。

L10　比丘たちよ、長い時の経過の後に、第四の太陽が世界に出現する時が来る。比丘たちよ、第四の太陽が世界に出現することによって、深くて、流れが速い、海に達するすべての大河は［日に］焼かれて、消滅し無くなる。

L11　比丘たちよ、諸行はこのように無常であり、…云々。

L12　比丘たちよ、長い時の経過の後に、第五の太陽が世界に出現する時が来る。比丘たちよ、第五の太陽の出現によって、この大海の水が百ヨージャナ尽き、二百、三百、四百、五百ヨージャナ、さらに千ヨージャナ、二千、三千、四千、さらに二万五千、四万、六万ヨージャナ(注40)、水が尽きる。

L13　[そして] 比丘たちよ、ヤシの樹七本 [ほどの高さ] のこの大海の水が存する時が来る。ヤシの樹六本、ヤシの樹五本、ヤシの樹四本、ヤシの樹三本、ヤシの樹二本、そしてヤシの樹 [一本] ほどの [高さの] 水が [存する時が来る]。

L14　比丘たちよ、人七人の [高さに] この大海の水がある時が来る。人六人、人五人、人四人、人三人、人二人、そして人 [一人] ほどの [高さに] 海水がある時が来る]。

L15　比丘たちよ、頸ほどの [高さに] この大海の水がある時が来る。わきの下の、胸の、臍の、腰の、太股の、膝の、すねの、踝ほどの [高さに] 水が [あるだけの時が来る]。

L16　比丘たちよ、この大海で指節が濡れる(注41) [に十分な] ほどに水が無い時が来る。

L17　比丘たちよ、諸行はこのように無常であり、比丘たちよ、諸行はこのように恒常なものではなく、このように信頼できないものであり、つかのまのもので、壊れやすいものであり、衰滅するものであり、避難処でなく、安息処でなく、依り処ではないものであり、無庇護者たるものである。そうである以上、比丘たちよ、すべての諸行を厭い離れるべきであり、[それに]欲求を失うべきであり、[それを] 捨離すべきである。(evaṃ aniccā bhikkhave saṅkhārā evaṃ adhuvā bhikkhave saṅkhārā evaṃ anassāsikā bhikkhave saṅkhārā ittarā bhejjakā jajjarā atāṇā aleṇā asaraṇā asaraṇibhūtā yāvañc'idaṃ bhikkhave alam eva sabbasaṅkhāresu nibbindituṃ alaṃ virajjituṃ alaṃ vimuccituṃ.)

L18　比丘たちよ、長い時の経過の後に、第六の太陽が世界に出現する時が来る。比丘たちよ、第六の太陽の出現によって、この大地、この大海、このスメール山王は [まず] 初めに煙をあげ、もうもうと煙をあげる。たとえば比丘たち

よ、陶工の家(窯)から［まず］初めに煙が上がるように、まさしくそのように、第六の太陽の出現によって、この大地、この大海、このスメール山王は[まず]初めに煙をあげ、もうもうと煙をあげる。

L19　比丘たちよ、諸行はこのように無常であり、このように恒常なものでなく、このように信頼できないものであり、つかのまのもので、壊れやすいものであり、衰滅するものであり、避難処でなく、安息処でなく、依り処ではないものであり、無庇護者たるものである。そうである以上、比丘たちよ、すべての諸行を厭い離れるべきであり、［それに］欲求を失うべきであり、［それを］捨離すべきである。

L20　比丘たちよ、長い時の経過の後に、第七の太陽が世界に出現する時が来る。比丘たちよ、第七の太陽の出現によって、この大地、この大海、このスメール山王は大なる火のかたまりに包まれ、一つの焔となり、一つの焔となったまま長い間燃える。

L21 比丘たちよ、このスメール山王が大なる火のかたまりに包まれ、長い間燃えつつある時、百ヨージャナの峰々、二百ヨージャナの峰々が崩壊し、三百ヨージャナの峰々が崩壊し、四百ヨージャナの峰々が崩壊し、五百ヨージャナの峰々が崩壊する。

L22　外のメールの山々における火の元素も荒れ狂う(注42)。

L23　この赤々と燃え、燃え輝き、まぶしく燃える大地は、最下にあった水の集合体(水輪)を消滅させる。たとえば火によって赤々と燃え、燃え輝き、まぶしく燃える真鍮の器が、少しの水の上に置かれたなら、その水をあっという間に消滅させる(吸い尽くす)であろうように、そのようにこの赤々と燃え、燃え輝き、まぶしく燃える大地は、最下にあった水の集合体を消滅させる。

L24　たとえば燃えつつあるサルピスあるいは胡麻油に、灰も煤もあることがないように、まさしくそのように、大なる火のかたまりに包まれ、長い間燃えつつあるこの大地とこの大海とスメール山王に、灰も［煙の］煤もあることはない。

18

L25　地の集合体(地輪)も消失し、水の集合体(水輪)も火の集合体(一切を燃やす火のかたまり？)も風の集合体(風輪)も消失する。

L26　ブラフマー神たちの諸住所も燃え尽き、ブラフマー神たちの諸宮殿も燃え尽きる。かの業の支配力によって結合していたものたちは消え失せる。火は吹き消える。広い、大きな、壮麗な、きらびやかな［大］ブラフマー神の宮殿も燃え尽きる。梵天界の領域も。

L27　これが古の法である。

L28　それ(世界)にとってここまで(このような状態まで)、『物質的世界の帰滅』(器世間散壊)が［展開した］。ここまでで(このような状態までで)、十中間劫が過ぎ去った。

L29　別のその［後の］二十中間劫のあいだ、［千］世界は空虚となり闇となり、［上に］覆盖がない状態でとどまる。

U　倶舎論注釈『ウパーイカー』(説一切有部)の七日経

U1　世尊はヴァイシャーリーの猿猴池の岸辺の僧院に滞在されていた。

U2　さて世尊は比丘たちに語りかけた。

U3　比丘たちよ、すべての諸行(現象の形成力)は無常であり、不恒常なものであり、信頼できないものであり、変異する性質(法)を有する故に、捨離すべきである。比丘たちよ、すべての諸行をまったく厭い離れるべきである。［それに］欲求を失うべきである。［それを］捨離すべきである。(dge slong dag 'du byed thams cad ni mi rtag pa mi brtan pa / yid brtan par bya ba ma yin pa yongs su 'gyur ba'i chos can yin pas spong bar bya'o // dge slong dag 'dus byas thams cad la yongs su skyo bar bya'o // 'dod chags dang bral bar bya'o // rnam par grol bar bya'o/)

U4　比丘たちよ、次のようになる時代がある――長い期間、神々は雨の流れを［地に］そそがない。神々が雨の流れをそそがないので、大地における種子植物、草木類と、薬草と雑草と『森の王』[注43]はすべて、ひからびて無くなる。

U5　比丘たちよ、これら諸行は[注44]無常であり、…(U3の文と同じ文を反復しているため省略)

U6　比丘たちよ、長い時が経過した後に、第二の太陽が出現する時がくる。第二の太陽が出現したため、この地上の小さな溝渠や大きな溝渠はすべて、ひからびて無くなる。

U7　比丘たちよ、これら諸行は無常であり、…（省略）

U8　比丘たちよ、長い時が経過した後に、この世界に第三の太陽が出現するその時がある。比丘たちよ、世界に第三の太陽が出現したため、この大地の小さな河や、大きな河はすべて、ひからびて無くなる。

U9　比丘たちよ、これら諸行は無常であり、…（省略）

U10　比丘たちよ、長い時が経過した後に、この世界に第四の太陽が出現する時がくる。比丘たちよ、この世界に第四の太陽が出現したため、無熱悩池という、そこから四つの河すなわちガンガー(gaṅgā)、シンドゥ(sindhu)、シーター(śītā)、バクシュ(vakṣu)(注45)が出ているところの、その大きな湖が、その時ひからびて消滅し無くなる(注46)。

U11　比丘たちよ、これら諸行は無常であり、…（省略）

U12　比丘たちよ、長い時[の経過]があって、この世界に第五の太陽が出現する時がくる(注47)。この世界に第五の太陽が出現したため、大海から百ヨージャナの水がかわいて消滅して無くなり、二百ヨージャナ、三、四、五、六、七［百ヨージャナ］の水がかわいて消滅して無くなる。

U13　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海から千ヨージャナの水がかわいて消滅して無くなり、二千ヨージャナ、三、四、五、六、七[千ヨージャナ］の水がかわいて消滅して無くなる(注48)。

U14　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海に七千ヨージャナの水が残り、六千ヨージャナ、五、四、三、二、一千ヨージャナの水が残る(注49)。

U15　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海に七ヨージャナの水が残り、六、五、四、三、二、一ヨージャナの水が残る。

U16　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海に七クローシャの水が残り、六、五、四、三、二、一クローシャの水が残る。

U17　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海にヤシの樹七本ほどの［高さの］水が残り、ヤシの樹六、五、四、三、二、一本ほどの水が残る。

U18　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海に、立つ人七人ほどの［高さの］水が残り、立つ人六、五、四、三、二、一人ほどの水が残る。

U19　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海に、頸ほどの[高さの]水が残り、わきの下ほどの、臍ほどの、腰ほどの、太股ほどの、すねほどの、踝を沈めるほどの水が残る。

U20　比丘たちよ、第五の太陽がこの世界に出現したため、大海の水は完全に、ひあがって消滅し無くなる。[かろうじて]指の先端を沈めるほどになる(施設論：最後には人差指を濡らすほども無くなる)。

U21　比丘たちよ、これら諸行は無常であり、…(省略)

U22　比丘たちよ、長い時が経過した後に、この世界に第六の太陽が出現する時がくる。比丘たちよ、第六の太陽が出現したため、この大地とスメール山王から煙を生じ、煙をもうもうと出し、もうもうたる煙を出す。たとえば陶工の窯で初め[に]火が点火されて、初めに煙を生じ、煙をもうもうと出し、もうもうたる煙を出すように、比丘たちよ、第六の太陽がこの世界に出現したため、この大地はスメール山王とともに煙を生じ、煙をもうもうと出し、もうもうたる煙を出す。

U23　比丘たちよ、これら諸行は無常であり、…(省略)

U24　比丘たちよ、長い時が経過した後に、この世界に第七の太陽が出現する時がくる。比丘たちよ、第七の太陽が出現したため、この大地はスメール山王とともに、燃え上がり、燃え輝き、つよく燃え輝きつつ、一つの焔となって、燃える。たとえば(注50)、十台の荷車に載せた薪によって、二十、三十、四十、五十の、百台の荷車に載せた薪、千台の荷車に載せた薪、百千台の荷車に載せた薪によって、大なる火のかたまりが燃えるであろう。たとえば、十の薪の荷によって、二十、三十、四十、五十の、百の薪の荷、千の薪の荷、無数の百千の薪の荷、他の無数の百の薪の荷、他の無数の千の薪の荷、他の無数の百千の薪の荷より生じた、大なる火のかたまりが燃えるごとく、まさしくそのように、第七の日輪が世界に出現することによって、この大地とスメール山王は燃え立ち燃え上がり、燃え輝き、つよく燃え輝きつつ、一つの焔となって、燃える。比丘たちよ、この大地とスメール山王が燃え立ち燃え上がり、燃え輝き、つよく燃え輝きつつ、一つの焔となって燃える時、[それらの]火炎は上方に風によって運ばれて、空虚なるブラフマー神の宮殿まで焼きつつ、到達する。

U25　比丘たちよ、極光浄天に生れてから未だ久しい時を過ごしていない生ける者たちは(注51)、この世界の帰滅について熟知せず、また［この世界の］生成について熟知しない者たちなので、彼らがかの火焔を見るとき、恐怖し、惑乱する。『ああ、この火焔が空虚なるブラフマー神の宮殿にいたるまでを燃やした後、こちらまで来ませんように』と(注52)。

U26　比丘たちよ、その時、極光浄天に先に生れた生ける者たちは、この世界の帰滅について熟知し、また［この世界の］生成について熟知しているので、彼らはその恐怖した者たちを安心させる。『恐れるな、友よ。恐れるな、友よ。昔もこの火炎は空虚なるブラフマー神の宮殿を燃やした後、まさにここで消えた。今も火炎は空虚なるブラフマー神の宮殿にいたるまでを燃やした後、ここで消えるであろう』と。

U27　比丘たちよ、第七の太陽が出現したため、スメール山王の百ヨージャナの峰々が崩壊し、消滅して、無くなる。二百、三百、四百、五百、六百、七百ヨージャナの峰々が崩壊し、消滅して、無くなる(注53)。

U28　比丘たちよ、焼け、燃えつきたこの大地とスメール山王には［煙の］煤もあることなく、灰の残りもあることはない。たとえば、サルピスあるいは胡麻油が空中で焼け、燃えつきた時、［煙の］煤もあることなく、灰の残りもあることがないように、そのように(注54)、比丘たちよ、焼け、燃えつきたこの大地とスメール山王には［煙の］煤もあることなく、灰の残りもあることはない。

U29　比丘たちよ、このことに関して、大海がひあがって消滅し無くなるということを如実に観る者以外に、誰が信じ、まことと思うだろうか。

U30　比丘たちよ、このことに関して、スメール山王が燃えて燃え尽き、消滅し無くなるということを如実に観る者以外に、誰が信じ、まことと思うだろうか。

U31　比丘たちよ、このことに関して、大地が燃えて燃え尽き、消滅し無くなる
22　ということを如実に観る者以外に、誰が信じ、まことと思うだろうか。

（経の後半の、善眼（mig bzangs＝sunetra）という名の外道師の話を省く）

犢子正量部系の七日経伝承の特徴

七つの太陽の出現の記述について、各部派の諸伝承の骨格を比較してみると、

次のようになる。(以下で1、2、3…の数字は、第一、第二、第三…の太陽の時を表わす)

(Ⅰ) パーリ上座部の七日経 (P)：1 草木→ 2 小河や小溝渠→ 3 五大河→ 4 七大湖→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(II) 有部の『ウパーイカー』七日経 (U)：1 草木→ 2 大小の溝渠→ 3 大小の河→ 4 四大河の出ずる無熱悩池→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(III) 有部の中阿含七日経：1 草木→ 2 溝渠や川→ 3 大河すべて→ 4 五大河の出ずる諸大泉源→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(IV) 有部の大毘婆沙論：1 草木→ 2 坑澗泉池→ 3 大河すべて→ 4 四大河の出ずる無熱悩池→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(V) 法蔵部の世記経：1 草木→ 2 小河や溝渠→ 3 七大河→ 4 無熱悩池などの大湖→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(VI) 犢子正量部の Loka-p (L)：1 草木→ 2 泉や小河→ 3 湖すべて→ 4 大河すべて→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(VII) 犢子正量部の立世論：1 草木→ 2 池沼や小湖→ 3 大湖すべて→ 4 無熱悩池と漫陀耆尼池と七林間河と四大河→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(VIII) 正量部のMSK：1 草木→ 2 小溝渠や河→ 3 マーナサなどの大湖→ 4 七大河→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

(IX) 正量部の文献X：1 草木→ 2 小河その他、河すべて→ 3 無熱悩などの大湖→ 4 七大河→ 5 海水→ 6 煙→ 7 焼尽

こうやって諸伝承の骨格を並べると、VI～IX の犢子正量部系の諸伝承だけの共通点がわかる。それは第三の太陽における「大湖」と、第四の太陽における「大河」の記述である(注55)。この第三と第四での、大湖→大河という順番が、犢子正量部系の諸伝承では共通している。これが犢子正量部系の伝承の特徴といえよう。これに対して、パーリ上座部や有部や法蔵部の伝承の基本構造では、第三と第四は大河→大湖という順番になる。

参考文献

[昨年の論文の末尾に出した参考文献と重複するものは省いた]

(1) 松田和信 (1982)：「梵文断片 Lokaprajñapti について —高貴寺・玉泉寺・四天王寺・知恩寺貝葉・インド所伝写本の分類と同定」、『仏教学』14号、pp. (1)-(21).

(2) 原実 (1999)：「植物の知覚 —古典インドの自然観察より」、『国際仏教学大学院大学研究紀要』2号、pp. 1-23.

(3) 湯山明 (1981)： 「厳松院貝葉顛末記」、『勝又俊教博士古稀記念論集 大乗仏教から密教へ』、pp. 1269-1278.

(4) 岡野潔 (1998a)「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」、『中央学術研究所紀要』第27号、55-91頁。

(5) Frank E. Reynolds & Mani B. Reynolds (1982) : *Three Worlds according to King Ruang. A Thai Buddhist Cosmology*, Berkeley.

注

(1) 拙稿「『大いなる帰滅の物語』(Mahāsaṃvartanīkathā) 第2章4節～第4章1節と並行資料の翻訳研究」、『哲学年報』63輯、2004年3月、1-110頁。本稿における略号はこの論文に従う。

(2) 七日経に関する書誌学的な情報は、松田和信 (1982) の注17～21や湯山明 (1981) の注16～20などに譲る。また Okano (1998), pp. 313-314 を参照。

(3) この翻訳にあたって、最初に恩師に感謝の言葉を述べたい。MSKの現存諸写本にはおびただしい誤りがあり、テキストを意味が通るものにするために、校訂者は随分頻繁に補修を施さなければならなかった。このテキストへの補修をどう行なうかによって、意味が全く違ったものになってしまう箇所も多い。補修にあたっては絶えず師のミヒャエル・ハーン (Michael Hahn) 先生に相談した。MSKの校訂は大変な難事であったが、一応満足できるものが出来たのはハーン先生のお力に負うところが多い。しかし思わぬ過ちを犯している箇所があるならば、それはひとえに私の力量のなさに起因する過ちである。——以下のMSKの翻訳では、昨年の論文の如く、MSKの各詩節に対し、それに内容的に対応する文献X (チベット訳) の和訳をMSKの和訳の下に置いた。MSKのすべての詩節について、文献Xに対応箇所が見出されるわけではない。今回の第5章2節～4節においては、文献Xに対応箇所がない詩節の方が多い。MSKは基本的に宇宙論的歴史を説く第2章から第6章にかけては、MSKの種本である文献Xに基づいて話を組み立てているが、しかし特にMSK5.2.7～15と5.4.1～11の部分は、それに対応する記述を全く文献Xに見出せない。なぜならこれらの詩節においてはMSKの作者サルヴァラクシタが文献Xを離れて、自ら創作しているからである。これらの詩節においては、種本にあたるものはじつは七日経の定型句なのである。このように、MSKには、文献Xに従って記述をなす部分のほかに、作者が創作の自由を楽しんでいる部分 (文献Xに基づかない部分) が、少しではあるが、ある。それ故に文献XからMSKは作ることが出来るが、MSKから文献Xは作れないのであり、それ故に文献

XがMSKの後に出来たという可能性はありえないわけである。

(4) この箇所で蔓草 (vallī) と雑草 (tṛṇa) と樹木 (vṛkṣa) があげられているが、古代インドにおいて植物は通常六分類され、その一例としてMBh 13.99.23では、樹木・灌木・ラター蔓草・ヴァリー蔓草・蘆・雑草 (vṛkṣa、gulma、latā、vallī、tvaksāra、tṛṇa) の六種があげられる。原実(1999)、pp.3-4.

(5) チベット訳の nyal stong (「空虚な眠り」あるいは「千の横臥」) の語は植物名らしいが、どの辞書にもない。MSKの対応偈 5.2.1 を見ると、vallī (蔓草) がこの訳語に相当すると思われるため、一応「蔓草」と訳した。

(6) チベット訳には chu bzhi thams cad「すべての四つの河」とあるが、これは翻訳かあるいは伝承の過程で生じた間違いと思われる。文脈を考えると、四大河がここで出てくるのは理解できない。chu bo thams cad「すべての河」と訂正して読む。すべての河とは、§197で出てくる七大河以外のすべての河、という意味である。

(7) マーナサ湖 (mānasa) とは、チベットのマナサロワル湖 (lake Manasarovar, skt. mānasa-sarovara) すなわち仏典で無熱悩 (anavatapta) と呼ばれる湖をさす。マーナサ湖に関しては Charles ALLEN (1994) : *A Mountain in Tibet*, Abacus Travel, pp. 17-32 ; M. R. KALE (1999) : *The Meghadūta of Kālidāsa*, Motilal Banarsidass, pp. 25-26 などに詳しい。

(8) 正量部の伝承における七大河はどの河を指すのか明らかではない。立世論の相当箇所では「七林間河及四大河」(223a17) という表現になっており、七林間河と四大河を同時にあげる。七林間河に関しては、立世論の別の箇所の、贍部洲の名の由来であるジャンブ樹にゆく途中の地理を示した記述において「又度七大樹林。林間有河。度是七河」とあって (175b19)、七大樹林の間にある七河を意味する。長阿含世記経によれば、七大河とは恒河 (Gaṅgā)、耶婆那河 (*Yavanā＝Yamunā)、婆羅河 (*Bara[ṇa] or *Balā?)、阿夷羅婆提河 (*Ayiravatī = Aciravatī)、阿摩怯河 (*Amahī?)、辛陀河 (Sindhu)、故舎河 (*Kośā or *Kuśā? ＝*Kauśikī or Kṛṣṇā?) である (大正１、137c25-26)。この世記経の七大河は、インドにおける仏教の勢力拡大に伴い、地理学的知識も広がったために、パーリの七日経に出てくる五大河 (Gaṅgā、Yamunā、Aciravatī、Sarabhū、Mahī) が、七大河に拡大されたもので、五大河よりも後の時代に属することを示す。

(9) 『水の性質をもつものは、結果がさかさまになる行為を有する』とは、水のような生き方をすることによって、つまり楽な方向に流れるという安易な行為によって、人は求めたものとは全く逆であるような苦しい結果を得てしまうものだ、という意味の格言的な言葉かと思われる。

(10) 七つの太陽が出現する時、巨大魚ティミンギラなどの住み処たる海が無くなってしまうことは、タイの『三界経』にも説かれている：REYNOLDS (1982), p. 309.

(11) 「欲望の諸対象を (kāmān) 焼く」とは、六欲天と人の世界を含む欲界 (kāmadhātu) つまり梵天界から下の世界を、七つの太陽が焼くことを特に意味していると思われる。ヒンドゥー教徒によって創造神と称されるブラフマー神 (大梵天) や梵衆天たちの住居たる梵天界は七つの太陽によって欲界と一緒に消滅する。ブラフマー神も、新たに別の世界を創造す

る役割をもつことなく命終する。

(12) 千のスメール山のそれぞれの上に七つの太陽が浮かんでいる姿は、あたかも千のストゥーパのそれぞれに、覆鉢の上、そして正方形の平頭の上に、七段（つまり七枚）の丸くて白い傘蓋（チャットラ）が載っている姿に似ている。七段の傘蓋は七つの太陽を表わし、覆鉢かそれとも平頭がスメール山を表わしている。

(13) この詩節は校訂が困難な詩節の一つであり、かなりあちこち写本の読みを訂正しなければ意味が通らない。この詩節は写本Aでは次のように記されている：*jagat samastaṃ calatācitāyām ārūḍham [u]d[dhu]mitam ādisūryeḥ | karo{{ti}}nmuke ddīpayitāntimo 'nya kriyāpi di[ṣṭ]yā mahatāṃ mahaṃbhyaḥ ‖* なお *{{ti}}* は写経生が自ら削除した字。

今回の和訳にあたって、私は次のように文を補修して読んだ(アステリスクがついている語は、私の「推定による読み」(conjecture) によるものであることを意味する)：

jagat samastaṃ calatā-citāyām
*ārūḍham uddhamitam ādi-*sūryaiḥ |*
*karô*tsukair dīpayitâ*ntimâ*ntya-*
*kriyâpi *diṣṭyā mahatāṃ *mahadbhyaḥ ‖*

この文は、私は先のドイツ語版に発表したものをさらに少し手直ししたものである。ドイツ語版のテキストでは次のように写本を修復して読んだ：

jagat samastaṃ calatā-citāyām
*ārūḍham uddhūmitam ādi-*sūryaiḥ |*
*karô*tkarair dīpayitâ*ntimâ*ntya-*
*kriyâpi *dīptyā mahatāṃ *mahattvam ‖*

訳：「世界すべては「うつろい易さ」の火葬の薪に上って、初めの諸太陽によって煙を出す（*uddhūmitam*）。最後の葬儀（火葬）が、あまたの光線により（*karôtkarair*）、輝きにおいて（*dīptyā*）偉大な者たちの（*mahatāṃ*）偉大さを（*mahattvam*）照らすだろう。」この、前の私の解釈における大きな欠点は、写本の*mahaṃbhyaḥ* の語形をむりやり「偉大さを」（**mahattvam*）と直して読んでいることで、これは不自然すぎる。また 写本の *karonmuke* を、**karotkarair*（おびただしい光線によって）と直して読んだことも無理をしすぎている感じがする。以上の不自然な読みを今回、もう少し無理がない方向に直してみたが、しかしこの詩節に関しては今後も恐らく訂正の試みが続けられるべきであろう。

(14) この詩節の冒頭の *athôddhatârciḥ śata-bhī* までは、写本Bの第32葉に記されているが、それに続く第33葉は欠けているので、そこからの箇所の校訂に写本Bを用いることはできない。この失われた第33葉には第5章3節の最後の詩節 (5.3.12) までが記されていたと思われる。この第33葉に記されていたはずの本文テキストを、私たちは写本Aのみによって、知ることが出来る。以下の5.3.2～5.3.12までの、ほぼ第5章第3節の全体のテキストは、写本Aのみに基づく。

(15) この詩節と次の詩節は、内容的に9世紀のVajradattaの *Lokeśvaraśataka* 第98詩節abを思わせる。

(16) パーダbの後ろ半分は、写本の第三行の左端が行に沿って虫に食われているため、その

箇所では文字の上半分が読めない状態になっている。*yugâgnisād-bhāvy a*∪-∪-*aḥ*|「……(虫食のための欠損)は世界終末の炎と化すだろう。」しかし行の下半分の残された文字の形から推測して、次のように、欠けた文字は補われるべきである：*yugâgnisād-bhāvy api vārināthaḥ*|つまり写本の欠損箇所に補われるべき、文の主語は、「海」(*vārināthaḥ*)の語である。

(17) この詩節の内容は、立世論の「世界天地(大地と訂正)燒熱出焰成一火性。以其熱勢吸下水輪。譬如銅槃火所燒熱。置淺水中吸水都盡。世界大地成一火性。吸下水輪亦復如是」(大正32, 223b15-18)という文と類似している。これについては岡野(1998a)、61-63頁を参照。この詩節に対応する記述は文献Xにはない。そのため、MSKの作者サルヴァラクシタは、文献Xではなく、インドにあった立世論の原典にあった上述の文(か、それとも正量部の七日経にあったかもしれない同じ文)を種にして、この詩節を作った可能性が考えられる。さまざまな部派の七日経の現存するテキスト伝承の中に、立世論の上述の文のような記述を見出すことは出来ないが、正量部の七日経にはそのような文があった可能性は否定できない。

(18) 写本Aには *saṃdhukrakālītavad eva dīptā* とある。*saṃdhukṣakâlātavad eva dīptā* と修正して読んだ。この *saṃdhukṣaka*(あるいは女性名詞 *saṃdhukṣakā?*)の語は、どの梵語辞書にも載っていない。*saṃdhukṣaka* とは、松明の一種の名前ではないかと推測されるが、すると「サンドゥクシャカ松明のように燃焼する」と訳すこともできよう。だが、将来この語の他の用例が見つかるまで、簡潔に「松明のように燃焼する」と訳しておく。もし *saṃdhukṣaka* ではなく *saṃdhukṣita* と読むならば、「点火された松明のように燃焼する」と訳すことができる。

(19) *kṛtvātitīvraṃ* の代わりに *kṛtvāpi tīvraṃ* と読む。

(20) 写本Aには *tā nāma*(あるいは *bhā nāma*)とあり、*te nāma* と修正して読んだ。「もちろんそれら(太陽)は」の意味となる。*bhā nāma* と読むならば、「もちろん星々は」という意味になる。しかし星は太陽のように苦熱を世界に与えるわけではないから、文の内容から、その読みは採らない。

(21) パーダaは写本Aでは *mṛṣṭeti kṛtvāgnimayī mayeyaṃ* となっているが、それを **sṛṣṭeti kṛtvāgnimayī mayeyaṃ* と読んで、このように訳した。「火から成るそれ」とは焔(*śikhā*)のことである。先の私のドイツ語版では、パーダaを **sraṣṭeti kṛtvāgnimayī *śikheyaṃ* と読んで、詩節の前半を次のように訳した：「火から成るその焔は、すべてを燃やした後に、[私が]創造主であると考えて(**sraṣṭēti kṛtvā*)、私のもとにやって来ることがないように！』とあたかも考えたかのように…」。しかし写本の *mayeyaṃ* の語を *śikheyaṃ* と読んだのは少し強引すぎたように思うので、ここで修正したい。なお冒頭の *iti kṛtvā* は、adv.として「その結果」「こうしたわけで、」という意味にとることもできよう(L. RENOU, *Grammaire Sanscrite*, p. 154；辻直四郎『サンスクリット文法』、306頁)。

(22) このMSKの詩節の内容は、有部の七日経の次の文(U25)を連想させる：「比丘たちよ、極光浄天に生れてから未だ久しい時を過ごしていない生ける者たちは、この世界の帰滅について熟知せず、また[この世界の]生成について熟知しない者たちなので、彼らがかの火

焔を見るとき、恐怖し、惑乱する。『**ああ、この火焔が空虚なるブラフマー神の宮殿にいたるまでを燃やした後、こちらまで来ませんように**』と」。この、太字の文において、両者は関係しあっているように思える。しかし、このU25の文の主語は極光浄天に生れた者たちであるのに対し、MSK 5.3.9の主語はブラフマー神である、という決定的な違いがある。そのため、両者の説いている内容を安易に同一であると見なすことはできない。有部の聖典の伝承では極光浄天に生れた者たちが火焔を見て畏れおののくが、正量部の聖典の伝承では、ブラフマー神が畏れおののく、と記されていたのかもしれない。正量部の立世論によれば、一切の衆生世間が皆悉く散尽し、梵先行天や梵衆天も皆悉く空虚になり、一千世界中の一切衆生は悉く空尽する時に、ただ梵天王のみが在る、という(大正32, 222c24-27)。つまり器世間の破壊が始まった時、空虚になった世界に大梵天だけが独り生き残っている。そして、水輪から起こった火焔が次第に上がって大梵天王の住所まで至る時に、大梵天はその寿命とその住所を捨てて、勝遍光天(極光浄天)に生じるという(223b22-24)。つまり立世論の記述によれば、大梵天王は火焔が彼の住所までやって来るのを見るはずであり、その時命終し、極光浄天に生じるのである。だから、その時に大梵天が恐怖に震えながら『ああ、この火焔がこちらまで来ませんように』と祈った、という正量部独自の聖典的伝承があったとしても不思議ではない。

(23) 写本のこの箇所は、摩耗のため文字がひどくぼんやりとしか読めない。そこで以下のように読みの提案を、二つ示してみたい。提案1：パーダabを、*anāhatānām api *tasya *bhūmyā *brāhmāḥ prayāsyanti vidhātṛ-dhāmnām* | と読む。訳：「[火によって]攻撃されなくても(*anāhatānām api*)、創造神(ブラフマー神)の諸住居の(*vidhātṛ-dhāmnām*)[中に棲む]梵界に属する者たちは(**brāhmāḥ*)、彼の場所(世界)から(**tasya *bhūmyāḥ*)出てゆくだろう(*prayāsyanti*)。なぜなら、主(ブラフマー神)が[ついに]とどまることが出来なかったそこにおいては、他の議論(見解)はすでに消えているから。」——提案2：パーダabを、*anāhatānām api *tat-praheyaṃ *vrātāḥ prayāsyanti vidhātṛ-dhāmnām* | と読む。訳：「創造神(ブラフマー神)の住居の群は(**vrātāḥ*)、[もし]破壊されていなくても(*anāhatānām api*)、彼によって(*tat-*)見捨てられるべき状態(*praheyaṃ*)に至るだろう(*prayāsyanti*)。なぜなら、主(ブラフマー神)が[ついに]とどまることが出来なかったそこにおいては、他の者たちの発話はすでに消えているから。」

(24) 原文は*dhātu-saṃvarto*であるが、*dhātu*(世界)の語は*bhājana-loka*(器たる世界)の意味で使われている。

(25) 写本Bは第33葉が欠落しているが、その欠けている範囲はこの箇所までである。

(26) vaśavartitāを仏教梵語として、「(原因による)支配性」と訳したが(cf. BHSD s.v. vaśavartin "controlling, having control over")、「(原因への)従属性、依存性」とも訳せるであろう。一切は、刹那的に生滅する原因に依って成立している。それゆえ、自己(実有としてのアートマン)はありえないし、自己の所有物もありえない。

(27) この箇所は本文が失われた。写本Aの写経生は、彼の手本の写本を読みながら筆写する際に、写すべき行を間違えて、うっかり前の行の文を再度書いてしてしまったようである。そのために、この5.4.8詩節のパーダbcの箇所において、二つ前の詩節5.4.6のパーダbcの

本文が入りこんで、その同文が繰り返されており、結果的に5.4.8詩節のパーダcの最後の語 bālāḥ の直前まで、元のパーダbcの本文は失われてしまった。この誤記の開始はパーダaの最後の語 samasti の直後からであるが、恐らくこの samasti が、前行に記された5.4.6詩節のパーダaの最後の語 samastaṃ と似ていたために、それが引きがねになって、誤写が引き起こされたのであろう。するとパーダbの jarāṃ 以下に続く文は、パーダcの最後の語 bālāḥ の前まで、5.4.6のパーダbcとは全然違った文であったはずであり、恐らく「それ(有為法)を安息処として、そこに入ろうとする者は」というような意味をもつ語が、そこに入るのであろう。

(28) PTS ed., AN, IV, pp. 100.2-103.23. (紙数の制約上、経の後半にある善眼の話 (103.24-106.2) は訳さない)

(29) E. DENIS (1977), I, 195.3-198.7.

(30) *Abhidharmakośaṭīkôpāyikā* of Śamathadeva, Peking ed., Otani No. 5595, Tu 117 a7-120a4 (*Saptasūryodayasūtra*); Derge ed., Tohoku No. 4094, Ju 102b3-105a1 (= Taipei, 204.3-209.1). 訳出にあたっては蔵訳施設論の世間施設の中の七日経にあたる部分も常に同時に参照した：*Lokaprajñapti*, Peking ed., Otani No. 5587, Khu, 63b3-66b1; Derge ed., Tohoku No. 4086, I, 53b6-56a4 (=Taipei, 106.6-111.4). 松田和信 (1982) が指摘しているように、蔵訳施設論は『ウパーイカー』の七日経に文面がよく一致する。施設論のその箇所は、七日経のテキストを、完全にではないが、忠実に引用しているといってよい。ただし違いをいえば、七日経においては「諸行は無常であり、云々」の定型句が反復されるのであるが、施設論は二度目以降の定型句を削除する。また七日経にある「比丘たちよ」という仏の呼びかけの言葉を施設論は削除する。また七日経の出だしの部分を施設論は省き、また経の後半にある善眼という名の外道師の話を全部省いている。なお蔵訳施設論のこの七日経対応箇所は、加藤清によって訳された(福田琢によって発表された)施設論の訳の中にある：福田琢 (2001)：「加藤清遺稿　蔵文和訳『世間施設』(4)」、『同朋大学論叢』84号、56-61頁。また七日経に相当する高貴寺貝葉の断片的な梵文テキストの和訳は松田和信 (1982) の論文に含まれている。それらの訳も訳出にあたって参照した。また漢訳の七日経には二本の有部系統の伝承が存する。中阿含経七法品七日経第八、大正 1、428c-429cと、薩鉢多酥哩踰捺野経、大正 1、811c-813a であるが、これらは『ウパーイカー』中の七日経と内容的にほぼ合うので、有部に属することが確かめられる。ただし漢訳中阿含の七日経には、古い五大河が新しい四大河に未だ差し替えられていないこと (大正 1、428c25-27)、大海の水の減少の規模を七千ヨージャナではなく七百ヨージャナで止めていることなど、パーリ伝承と共通する古い伝承を残している点を指摘できる。有部系統の七日経の伝承を伝えるものとしてはこの他に阿毘達磨大毘婆沙論 (大正 27、691a13-b3) などがある。

(31) これらの諸本の比較によって、次のことが明らかになるであろう。有部の伝承の固有性は、U10、U24、U25、U26 に出るが、それらの固有性はLoka-pに見出せない。また、パーリ上座部の伝承の固有性は P8、P10、P15 に出るが、それらの固有性はLoka-pに見出せない。従ってLoka-pの七日経の伝承は有部やパーリ上座部に属さないことがわかる。Loka-pの伝承の固有性は L23、L26 などに出るが、それらはMSKや文献Xの伝承と合致する。従っ

て、Loka-pの伝承は正量部に属する。

(32) 世記経、大正 1、137c-138c；起世経、大正 1、354c-355c； 起世因本経、大正 1、410a-c；大樓炭経、大正 1、302c-303c；増壹阿含経七日品第四十之一、大正 2、736b-c.

(33) 原語 bījagāma-bhūtagāma を「種子植物、草木類」と訳したが、穀物類と樹木を意味するこれらの語はペアで使われて、植物全般を意味すると思われる。「植物を刈ってはならない」という小乗の戒律の条文に、これらの語はペアで使われる。平川彰『二百五十戒の研究 III』、春秋社、158-171頁を参照。

(34) 原語 vanaspati を『森の王』と訳したが、それはマヌ法典の定義によれば「花がなくても果実を結ぶ樹」一般を意味する。Manusmṛti, I 46-48 には、oṣadhi、vanaspati、vṛkṣa、tṛṇa、pratāla、vallī という植物の六分類が記されるが、そこにはこの『森の王』vanaspati のほか、薬草 (oṣadhi 一年生植物) や雑草 (tṛṇa) という名称の分類も含まれている。そこでは、樹に対して、花と実がある樹 (vṛkṣa) と、花がなくても実を結ぶ樹 (vanaspati) が区別されている。このような植物の分類に関して、原実(1999)、pp. 3-4 を参照。また、tiṇa を「雑草」と訳したが、ブッダゴーサの註釈は、tiṇa について bahisārā tāla-nāḷikerādayo (オウギヤシ、ターラ樹椰子樹など)と説明し、tiṇa をヤシ科の植物の意味にとるが、しかし私は上記の植物の六分類に従い、tiṇa(=tṛṇa) を「雑草」の意味にとった。Manusmṛti, I 48 のMedhātithi 註釈では、tṛṇa を「kuśa、śādvala、śaṅkhapuṣpī など」と例をあげており、ヤシ科の植物とはしていない。Cf. Ganganath JHA (1999), *Manusmṛti. With the 'Manubhāṣya' of Medhātithi*, Motilal Banarsidass, Vol. 1, p. 29；Vol. 3, p. 90.

(35) 諸河の源泉たるこれらの七大湖はヒマラヤ山 (Himavanta) にあると伝えられる。Cf. REYNOLDS (1982), p. 292.

(36) [涅槃の] 境地を見た者 (diṭṭhapada) とは、聖者の流れに入った人 (預流) を意味する。

(37) この「世尊は以下のように説かれた」という言葉によって、以下に続く文が聖典のテキスト (七日経) をそのまま引用したものであることが知られるが、その引用文がパーリ上座部が伝承する七日経とあまりに違っていることは、Loka-pが引用した七日経の伝承が、パーリ上座部以外の部派に属していたことの証拠となる。

(38) このL5では 2 写本とも *evaṃ abhūtā*(このように非有である)とあるが、L17 や L19 の同じ定型句では *evaṃ adhuvā* (このように恒常なものでない) となっている。*abhūtā* は *adhuvā* の写し誤りとみるべきである。

(39) 2 写本には *udakassajā* とあって意味不明である。立世論には「深大の江湖」とあるので、私は試みに *udaka-ssarā* 「水湖」と直して読んでみた。校訂者の DENIS は *uda-kacchā* 「沼地」と直して読むが、並行文献の記述から推測しても、ここに沼地 (watery soil, swamp)という意味の語が来るはずはないと思う。立世論の伝承に近い何らかの語が来るはずである。

(40) 大海の水がどこまで減少したかについて、Loka-pと立世論の伝承では六万ヨージャナまで数字をあげるのに対し、有部の『ウパーイカー』の伝承 (U13) では七千ヨージャナまで数字をあげる。有部の古い伝承を伝える中阿含『七日経』(大正 1、429a2) やパーリ上座

部の伝承 (P12) では七百ヨージャナまで数字をあげる。海の深さについてのこのような数字の違いは、この経典が作られた時には、まだ海の深さについて仏教徒の意見が固まっていなかったことを意味する。海を浅く考える七百とする伝承が恐らく最も古く、七千とする伝承が次に古く、六万とする伝承が最も新しいのであろう。アビダルマ仏教の時代に、体系的な理論としての宇宙論が形成されると、どの部派も、海の最深部を水面下八万ヨージャナとみなしたようであるが、立世論の犢子正量部の伝承は、このアビダルマ仏教の宇宙論の教理と整合性をもたせるために、それに適した数字の六万ヨージャナに直したものなのであろう。このことは、正量部の阿含の編集された時代の新しさを示すように思われる。

(41) *kaḍḍhetuṃ* を **klettuṃ* か **kiledituṃ* (濡れる) と読む。

(42) 文の意味が理解困難である。立世論ではこの文に対応する文は「是時外四大中一切火自然而發」(是時、外の四大中の一切に火は自然に而も發す) となっている (大正32、223 b14-15)。

(43) 現存しない梵文テキストの原語は恐らく vanaspati であり、『森の王』と訳した。これを蔵訳ウパーイカーは「森」(nags tshal) と訳し、蔵訳施設論は「果実の樹」('bras bu'i shing) と訳している。

(44) このU5の文や、以下の同じ文において、チベット語訳では「諸行」('du byed =saṃskāra) の語が「有為」('dus byas =saṃskṛta 造られたもの) の語になっている。しかしU3の同じ文では諸行となっているし、またこの文はパーリ文などと共通する定型句であるから、「有為」ではなく「諸行」とすべきであり、一貫した態度で「諸行」と訳すことにする。

(45) ここで倶舎論世間品などの有部のアビダルマ宇宙論の記述と一致する四大河の名が述べられるが、これは新しい伝承であるように思われる。パーリの七日経ではこの四大河と全く名称が異なる五大河が説かれるが、そちらの伝承の方が古い本来的なものであったように思われる。ある時代に有部の七日経の伝承では、恐らくアビダルマの宇宙論と整合性をもたせるために、古い五大河の伝承が、新しい四大河の伝承に差し替えられたのであろう。この「差し替え」の事実は、有部の古い伝承を伝える中阿含『七日経』(大正 1、428c25-27) では、パーリの伝承と同様に、古い五大河が記されていることによって、確認できる。大毘婆沙論の七日経に対応する箇所の記述(大正 27、691a22)や佛説薩鉢多酥哩踰捺野経の記述 (大正 1、812a13) では、新しい四大河の伝承になっている。

(46) ここでは施設論の対応文にみられる関係代名詞の構文に従って訳した。蔵文『ウパーイカー』の文では、「この世界に第四の太陽が出現したため、小さな湖 [すべて] と、無熱悩 (アナヴァタプタ) という大きな湖と、[四]大河、すなわちガンガー、シンドゥ、シーター、バクシュ、これら[すべて]もその時に、ひからびて、無くなる」とある。第四の太陽によって消えるものは、『ウパーイカー』が伝承する文によれば、小さな湖と大河と無熱悩池の三者であるが、他方、施設論が伝承する文によれば、消えるものは、小さな湖と、大河の源泉である無熱悩池の二者である。このように違いがあるが、施設論の文の方が正しいと思われる (蔵文『ウパーイカー』の文は関係代名詞の構文が正確に訳されなかったために生じたもののように思われる)。先の第三の太陽によって、小さな河や大きな河が消えたはずであるから、ここでもう一度大河が出てくると、先の記述と矛盾することになるからである。

(47)　この第五の太陽の出現の箇所を記した中央アジア出土の小さな写本断片がある：*Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil 7, 1995, p. 86, Kat.-Nr. 1678.

(48)　このU13の段落は、蔵訳施設論には欠けている。漢訳中阿含七日経にもないから、有部の古い伝承ではこの段落は無かったのであろう。つまり大海水の減少は古い伝承では七百ヨージャナまででであったが、新しい伝承ではそれを七千ヨージャナまで規模を拡大したのであろう。薩鉢多酥哩踰捺野経は新しい伝承の側に属する。

(49)　この文の直後に、蔵訳施設論には「第五の太陽が世界に出現したため、大海に七百ヨージャナの水が残り、六百、五百、四百、三百、二百、一百ヨージャナの水が残る。」という一節があるが、『ウパーイカー』にはそれにあたる文がない。

(50)　「たとえば」以下の文は、この蔵訳『ウパーイカー』の文とよく一致する梵文施設論の断片的なテキストが高貴寺貝葉として現存している。松田和信 (1982) を参照。このようにほぼ同じ部派伝承に属する梵文がある箇所は、梵文とチベット訳の両方を参照して訳した。

(51)　この文からは、高貴寺貝葉に加えて、梵文倶舎論における阿含の引用からも、相当する梵文テキストを、かなり短い文であるが、得ることが出来る。

(52)　この箇所は、蔵文ウパーイカーの文よりも、梵文あるいは蔵文の施設論の文の方がわかりやすく正しいと思われるので、それらによって訳した。

(53)　この箇所は、梵文施設論断片と蔵訳施設論に従って訳した。蔵訳『ウパーイカー』の文を訳せば：「比丘たちよ、スメール山王が、燃え上がり、燃え輝き、つよく燃え輝きつつ、一つの焔となって燃える時、一千ヨージャナの宮殿が焼かれ、消滅して、無くなる。二、三、四、五、六、七千ヨージャナの宮殿が焼かれ、消滅し、無くなる」。『ウパーイカー』はここで宮殿 (gzhal med khang ＝*vimāna) という訳をなしているが、原語は kūṭa であり、施設論のように峰または山の頂と訳すべきであろう。

(54)　高貴寺貝葉の梵文施設論断片はここで終わっている。

(55)　ただしVIIの立世論では無熱悩池と漫陀耆尼池という二つの大湖の名が例外的に、七林間河と四大河つまり「大河」の所にくっついており、それが少し余計である。本来のシンプルな犢子正量部の基本形の上に、後の時代に大湖や大河の具体的な固有名詞が付加されることによって、このような少し違った伝承が出来上がったと理解できる。